

みずからを語り始める親たちも少なくない。自分を受け容れ、理解してくれる人との出会いが、親になるためにも大切なのである。己を知り、それが欠点であっても親として失格なのではなく、自分の弱さと向き合うことができ初めて子どもの弱さを受け容れることができるのである。

どの子どもも愛されたいと願い、誰でも変身する力がそなわっている。子どもはどのように変身するかは誰もわからない。だからこそ、親の関わりが重要になってくる。「見た目で判断しないで」という子どもたちの叫びは、実は外見のことだけではなく、「一つの結果だけでその人を判断するのはやめてよ」という意味が含まれているのである。固定観念だけで子どもを見るのではなく、親も自分を変えることができる柔軟性、これこそ最も大切なことなのではないだろうか。

親ははじめから成熟しているわけではない。子どもによって親になっていくのである。親として子どもに残してやること以上に、子どもから学ぶことは多い。「この子と出会えてよかった」、そう思える人生であってほしい。

【文献】

- (1) 細井啓子「子どもはみんなお母さんがキライ？」あすなる書房、一九九九
- (2) 細井啓子『コンプレックスアラカルト』ブレーン出版、二〇〇二

親が親になりきれない背景

——少子化、高学歴化、産業化の落とし穴

少子化の背景が示唆するものは

「一人二人で親になると思うな、三人、四人育ててはじめて親になるのだから」

これはある子育てセミナーで参加者の女性から伺った話だが、その方が初産のとき、一週間たって帰ろうとする実家の母が残した言葉とのことである。まさに子育ての知恵の結晶を教わる思いがしたが、同時にこの原則に従えば、私が出会うほとんどの親は、親になれないまま子どもに向かわざるをえないことに気がついた。日本の家庭の子どもが平均二人になったのは、一九六〇年前後だからである。そして今、「二人っ子」として育った最初の世代も四十代

静岡大学教授
馬居政幸

に入ろうとしている。もし、「親になりきれない親」というのが、現在、乳幼児期や学童期の子どもをもつ親の問題とすれば、その根は親の親、すなわち今六十代に達している人たちの子育てにまで戻らなければならなくなる。

このように述べると違和感をもつ方がおられよう。とりわけ専業主婦として子育て中心の人生を送ってきた方は、子どもよりも仕事や自分の都合を優先するかに見える最近の若い親と一緒にされては困ると思われるであろう。だが考えてほしい。そのような親を誰が育てたかを。

いったい、親になりきるということはどういうことなのか。すべてを子どものために費やす、というのであれば、人間の歴史で、そのような親はもともと多数派ではなかつ

た。少なくとも戦前の日本では、情情的には親であることを自己認定(アイデンティティ)の中核においても、生活のすべてを子どもに費やす余裕はなかった。多産多死の社会は、生きるための労苦にその時間の大半が割かれた。もっぱら家事育児に従事する女性、すなわち専業主婦が多数派になったのは、一九六〇年を前後して本格化する高度経済成長とともにである。子ども二人を母親が専従で育てる家庭は、戦後復興を終え、豊かさを求めて飛び立とうとする日本経済の担い手を支える場として誕生したわけである。

したがって、日本の少子化は最近始まった現象ではない。第二次大戦後のベビーブーマーとして四九年生まれの二七〇万人をピークとする団塊の世代が生まれたあと、わずか一〇年で子どものお出生総数は一六〇万前後に、一人の女性が産む子どもの平均(合計特殊出生率)は四・三(四九年)から二・一と半減する。敗戦後の日本の復興を果たすために、「貧乏人の子沢山」から「少なく産んでよく育てる社会」への転換を目的に産児制限が推奨された結果である。ただし、この減少が直接現在の少子化に進むわけではない。団塊の世代の成長とともに親の数が増え、出生数は七三年の二〇九万(団塊ジュニア)に向かって増加するが、合計特殊出生率は人口の再生産に必要な二・〇八(人

きれないどころか、親になること自体を避けた結果が、現在の少子化現象の背景にある現実だからである。

父親の場合はどうか。子どものために働くという仕事への動機付けとしての父の意識はあっても、子育てのノウハウを伴う父親を人生に体現してきた方がどれほどおられるか。元来、専業主婦の誕生は、産業(工業)化の進行に伴う職住分離と性別役割分業による夫の被雇用者(サラリーマン)化とセット。それは働く姿とともにあった父の世界が子どもの中から消えることでもあった。ただし、夫婦(父母)の間に親として子どもを良く育てるための役割分業による予定調和の意識はあったであろう。夫婦＝父母ともに親であることに疑いをもつ方は少なかったはず。

とすれば、ますます問題の根は深まる。そのような子育て専従の母親と仕事専従の父親のもとで育った人たちが、現在の親になりきれない親の多数派の親とすれば。問うべきは、自己の人生を子どものために費やすかどうかではなく、自分たちの営みでこの世に生を得た人を、一人の人間として自立させられるかどうかではないか。判断の基準は親の現在ではなく子どもの未来におくべきである。

ただし、子どもの自立の責任のすべてを一組の親のあり方に帰するほど社会は単純ではない。少ない子どもの幸せ

口置換値)とはほぼ同率で推移する。先に六〇年前後を境に、「二人っ子」の時代になったと述べた理由である。通常この時期の子どもの減少は、積極的に減らした意味も含め、少産化という人口学上の概念で位置づけられる。

ところが、八〇年代に入るところから再び合計特殊出生率が下がりはじめ、八九年の「一・五七ショック」を経て〇一年は一・三三。出生数も一二〇万人前後になる。この二回目の合計特殊出生率低下にもない、少子化という言葉が一般化した。その原因は晩婚化もしくは結婚をしない男女の増加。日本は結婚しなければ子どもを産まない社会であり、上記の少産化が進行した時期を境に、結婚をすれば子ども二人という社会になった。○または二、これが少子化のラベルとともに知られるようになった近年の出生率低下の実体である。社会全体の子どもの数は大きく変容してきたが、家庭のなかの子どもの数と位置づけは、六〇年以降、変化は少ない。そして今、少産化の最初の世代(少産世代)が四〇歳前後になったとすれば、問題の根を少産世代の生育過程、いかえれば現在六〇歳代にいる方たちの子育て過程に求めざるをえない。専業主婦が少なく産んでよく育てたはずの、その意味で親になりきった人たちの育てた子が自分の子を産む年代になったときに、親になり

を願う親の思いは、社会の制度とかがわかって具体化する。

高学歴化と産業化の進行がもたらしたものは

自立である以上、具体的な社会のあり方との関係が問題になる。農業社会であれば、農の技能と家の維持と家族の世話がセットになる。多世代と多子が同居する家族のなかで、子に親の生き方を伝え、子はその経験を自分の子に伝える一方で親の生涯を支えることが課題になる。そこでは、親からの自立の価値は低い。だが、職と住の移動を前提に、自己の意欲と才知で人生を開くことが基本の産業社会では、どうなるか。親と子が異なる人生を歩むことが当然視され、自分たちの世界から出て行くことを前提に子育てなければならぬ。親子の関係は人生の一時期に限定され、親子ともに独自の人生を歩むことが求められる。代々家を受け継ぐことが重視された農業社会とは、逆の課題である。

だが、これまでの親子の論議のなかで、良き親であることは問われても、親の役割の終え方についてどれほど関心が払われてきたか。その典型を最近のパラサイト家族と揶揄する論議にみる事ができる。少子化の原因の晩婚あるいは未婚化の進行と関わって、都市の結婚しない男女、と

りわけ女性の親との同居が問題視されるが、その女性たちが社会に出た八〇年代に、親と同居を採用条件にした企業が少なくなかったはず。あるいは、働く女性が子育てのために自分の母親の力を借りたことは多いはず。パラサイト(寄生虫)関係は今に始まった現象ではない。親子の同居は農業社会では当然のこと。長男は家を出てはならず、家族の世話で生家に留まる女性も少なくなかった。

ただし、子どもを二人にした親が子どもの自立を望まなかったわけではない。産業化は氏索性ではなく能力を重視する。わが子の才知を高める保証を得るため、より高い学校歴を子どもの未来のために準備する、という意味で日本の親は産業化に対応しようとした。少産化の動機となった「よく育てる」という親の思いは、高学歴化という社会制度として現実化した。その証左が、子ども二人が定着した六〇年生まれが一五歳に達したときに高校進学率が九割を超え、短大を含む大学への進学率が四割、専修・専門学校を入れば高卒後の進学者が同年代の七割近くになったこと。その背後に義務教育修了者を工場労働者、高校卒業者を中堅技術者、大学卒業者をエリート、という学歴別の人材配分装置の一般化があった。戦後の産業化は、学校での成績(本人の努力)で自己の社会的地位を決定できる仕組み

とが加わった。

すなわち、二人っ子として学校中心に育つ過程には、自分の親以外に身近に子どもを育てる女性の役割を経験する機会はきわめて少ない。観念の世界で理想的な親を描けても、子育ての喜びと理不尽さの感覚の学習はできない。何よりも、成績を代表に学校が要求する自己実現の価値のヒエラルキー(自分が努力した結果は自分に返ってくる)のなかに、他者(子どもや夫)の成長(昇進)に自己実現の成果を委ねる生き方は入っていない。すなわち、専業主婦の母のもとで学校中心に二人っ子として育った女性には、自己認定(アイデンティファイ)の対象に、母として生きる自己像を定位する機会を得ないまま成人することが枠付けられた。母親像は、職業人としての自分と並ぶ選択可能な観念の一つ以上のものではない。おまけに、最も身近なモデルである自分の母親の姿から、母として生きるのみでは自己の人生が終わらない現実をリアルにビルトインせざるをえなかった。専業主婦が理想とされる時代の終焉の鍵は、専業主婦に育てられた娘によって開けられたわけである。

落とし穴は二子

さらに少子化は母親となる女性に、もう一つの現実を迫

みとともに進化したわけである。ただし、高校は全入に近くとも、その上の大学定員が一定なら、親の子どもへの愛の証としての進学への夢は、結果的に進学競争の激化として子どもに迫ることになる。それも男女を問わず。原則として、学校の成績(試験の評価)に性差は考慮されないからである。このことは女性の進学に関してプラスに機能した。短大というバイパスを経由してではあるが、女性の進学率は八〇年代半ばに男子を上回ったからである。

このように、少産世代から女性の高学歴化が始まるが、それは、性差ではなく自分の能力で自己の位置を決定することが自己形成の中核に位置付けられることを意味した。そしてその先には自己実現を最上位とする生き方が待っているとともに、工業化から情報化の段階に入った八〇年代の日本社会が彼女らを迎えた。経済の拡大とサービス化による求人不足と労働集約型から知識集約型への転換に加えて、男女雇用機会均等法の後押しもあって、多くの女性が仕事の面白さと自由な時間と友人と金銭を得る喜びを味わった。だがそれは、自分が育つ過程で、母親になるための準備の機会を失うことでもあった。さらに、専業主婦として自分を育てる母への感謝は育まれても、三十代後半にはその役割が終わり、新たな人生にとまどう母の姿をみるこ

ることになる。子育ての孤立化である。人口千人のなかで一年間に生まれた子どもの数を示す普通出生率をみると、団塊の世代が約三四人に対して、団塊ジュニアは約一八人と半減。どこの家にも四人から五人の子どものがいたのが二人になったことを反映する数値である。ところが、そのまた半分の九人台が、最近の数値。ただし、結婚した女性の産む子どもの数が二人というのはつい最近まで変化していない。ということは、近年の少子化は、家族のなかの子どもの数との関係でいえば、子どもがいる家族自体の減少としてとらえなければならぬ。

団塊の世代は自分と友だち双方の兄弟姉妹との関係を通じて、さまざまな年代と交わることができた。生活の糧のために働く両親にかわって、先輩、後輩、仲間が自己形成のエージェントになる。その子どもは世代に重なる団塊ジュニアは兄弟姉妹が二人になり、異年齢と交わる機会は失ったが、同年齢の遊び友だちを近所で見つけることはできた。新たな自分に飛翔するためのモデルは得られなくとも、現状を承認してくれる仲間はいたわけである。だが、現在の少子世代は自己確認の鏡となる同年齢の仲間をも失いつつある。このような少子化に伴う子どもたちの世界の変化は、そのまま親、とりわけ専業主婦として子育てに向かう

母親の現実と重なる。自分を確認する鏡を見いだせないのは、母親の方ではないか。

夫Ⅱ父親となる男性の場合はどうか。専業主婦の前提が性別役割分業である以上、もともと親になるための準備は予定に入っていなかった。本来ならば、子どもを二人に限定し、男女ともに変わりなく高学歴に育て、ともに働く社会を準備するならば、子育ての仕組みもまた共同参画型の制度に転換しなければならなかったはず。その改編は少産世代の誕生とともに始めるべき課題であった。ところが実際はどうだったか。後追いであったが、男並みの平等には配慮してきたものの、女性に割り振ってきた家事育児の役割を平等にすることに、とれだけ制度的に保障してきたか。結局は、女性の労働力を必要とする社会になっているにもかかわらず、子育ての責任は子どもを産んだ母親一人の責任とする意識と制度が変わらないままにきたことが、現在の出生率の低下をもたらした。その条件のもとで育児に向かう母親は、まさに機能不全になった社会制度と慣習の矛盾を、たった一人で背負わなければならない。その重圧に耐える悲鳴にも似た叫び声が、育児不安となつてふきだしてはいないか。児童虐待もまた、同じ文脈から捉え返すべきではないか。そして、この孤立したモデルなき子育て

世代間で引き継がれていく 「育てる営み」

育てられて育つ

核家族の下で初めて子どもの誕生を迎えるとき、親になつた人たちもそのとき初めて親として「誕生」する。子どもが未熟なとき、親になつた人もいまだ親として未熟なのである。その未熟な親の「育てる営み」を通して子どもが徐々に成長を遂げていくにつれ、親もまた親として徐々に成熟していく。つまり、「誕生とその後の成長」というテーマは、生涯において二度生じる。一度目は子どもとときに、二度目は親になつた後に。

「育てる営み」なくしては子どもが育つことはありえない。同様に、その「育てる営み」なくしては親が親として

の悲劇を避ける知恵(苦肉の策?)が、親になりきることにのたまどい(拒否?)とみなすことができまいか。

問題は、女性にのみ仕事と育児の両立を求める社会システムの方。もし本当に女性が一斉に育児のために職場を放棄したら、日本の社会は文字通り機能不全に陥る。

このように少産世代の成長過程を位置づけるなら、少子化、高学歴化、産業化の落とし穴とは、子育て期に求められた親と社会制度のありかたど、その子が成長し親になる年代になつたときに求められる親と社会制度のありかたの間にあるズレとしてみなすことができよう。良かれと思つたことが、時と場所を違えば悪くなることは世の常とはいえ、子どものためと信じて自らの人生を創造してきた人たちにとっては、認めがたい評価かもしれない。だが、少子化、高学歴化、産業化の流れを止め得ないとすれば、その穴は、ありもしない過去の母親の美化ではなく、共同参画を阻む制度と意識の改編によってでしか埋め得ない。その鍵は今、親、とりわけ母親であることをためらう人たちによりそうることによつてしか見いだせないと考ええる。(この点については次の拙文を参照いただきたい。「育児不安とは何か——家族社会学の立場から」、『こころの科学』一〇三、日本評論社、二〇〇二)

京都大学教授
鯨岡峻

育つこともありえない。「育つ」という表現はその自動詞的意味からすれば自ら育つことのように聞こえるけれども、共に生きる他者から分断されて自分ひとりだけで育つなどということとは決してありえない。「育つ」はその意味では「育てられる」と常に対になっている。してみると、子どもの側が親から育てられて育つと言わねばならないように、親の側も「育てる営みを通して親として育てられ、親として育つ」と言わねばならない。しかも親の側は最初から親だったのでなく、みなかつては子どもだったのだから、自分の親によつて「育てられて育つ」という経験を内に秘めている。こうして親はわが子を育てる営みを通して、二重の「育てられて育つ」という経験をしていること

特集 親の成熟 子どもの育ち

成熟した親の条件——親として、子どもとして……………細井啓子 1

親が親になりきれない背景——少子化、高学歴化、産業化の落とし穴……………馬居政幸 11

世代間で引き継がれていく「育てる営み」……………鯨岡 峻 17

未成熟な親に育てられた子……………平井正三 23

友だちのような親子関係……………前川あさ美 30

子離れできない親……………鎌田 稔 35

親離れできない親——精神科「小児・思春期」専門外来と
子育て支援ボランティア活動からの報告……………原田正文 41

小児科医から見た「親になりきれない親」……………沼口俊介 46

○成熟した親になるには
まずはよりよい夫婦関係から……………加藤邦子 63

二世大家族、三世大家族のそれぞれのメリットを生かす……………高橋君江 68

子どもの言い分や求めをどう聴くか……………田中輝美 73

大人になりきれない親のカウンセリング

子どもの成長を待てない親……………前田研史 81

親同士のつきあいが苦痛な親……………仲手川勉 84

子どもにも暴力をふるう親……………金井雅子 87

○親の育ちと子育てを支援する

学校としてできること・したいこと……………有村久善 90

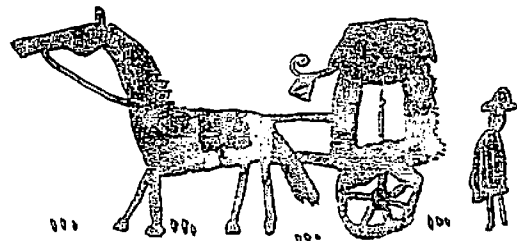
ベビーシッターと協力する……………中館慈子 96

教師の成熟の度合いと教育実践……………武田 忠 102

学校化社会をどうするの？

「特別企画」教師が生かすアサーション・トレーニング……………上野千鶴子 52
仕事と心に余裕を生むアサーション——教師のためのアサーション・トレーニングから……………園田雅代 107

教師のためのカウンセラートレーニング③ 不登校に取り組む[3]——不登校をめぐるトラブルの解決法……………菅野 純 147
しんりがく最新研究③(リレー連載) ふたご研究から何がわかるか……………安藤寿康 118
家族のもんだい 解決銀行——フリーセラピーの実践③ インタラクショナル・ビュー(2)……………長谷川啓三 126
おとなの知らない小学生の世界③ 子どもが好きなハッキリ味……………斎藤次郎 124
ママの元気・オンナの元気①野放しのツケ……………橋 由子 60
d'angle 2002④性教育……………団 士郎 78
親と教師のカウンセリングルーム 落ち着きがなく集団行動のとれない子……………高森淳一 131
いさいき小学校 Watching 113④恋 田上不二夫 29 ④魂の田・子どもの声 羽矢節子 62 ④ 教室だより林田三枝子 80 ④保田富から 鈴木ひろみ 117 ④今月の本棚 136④獨編後記 沢崎道夫 148



2002 Vol. 56 No. 16

児童心理 CONTENTS